

■川田甕江(剛) 漢文学者。備中松山最後の藩主板倉勝清から信頼、維新政府からも高い評価も、薩摩藩の重野安繹と葛藤。

かわだおうこう

富籤流行・・・1830＝ 備中国浅口郡阿賀崎村(玉島)で、商家(綿・肥料問屋)川田資嘉の次男に生まれる。幼名は竹二郎。

鼠小僧磔・・・1832＝ 2歳：父が死去、以後、母方の伯父の家で養われ、

滑稽+人情本 1835＝ 5歳：母も死去、

大塩平八郎乱1837＝ 7歳：この頃、伯父から、元武家であることを教えられた上、刀と書のどちらを学びたいか尋ねられ、'多病も

って戦には耐えられず、文をもって一家を成す'と答えて、褒められた上、面倒を見て貰いながら育つ。

蚕社の獄・・・1839＝ 9歳：

順天堂始・・・1843＝13歳：この年儒学者鎌田玄溪が玉島に塾を開くや師事するとともに、歌人小野務翁に入門して国学も嗜む。

阿部正弘首座1845＝15歳：

俊才ぶりを発揮し、

・・・・・・1848＝18歳：

国定忠治磔・・・1850＝20歳：三島中洲が来訪、以後親交。

万次郎帰国・・・1852＝22歳：途中伊勢国津に三島中洲を訪ね、江戸に出る。古賀茶溪・大橋訥庵らに師事、藤森弘庵に文の添削を請い

、安井息軒・塩谷岩陰・芳野金陵らの諸先輩を訪ねるなど、富裕な家の食客(家庭教師)になるなどしながら

、苦学するうち、他の有力者らからも、その才学を称されるようになり、

ペリー来航・・・1853＝23歳：

開国開港・・・1854＝24歳：近江大溝藩から客分として招かれ、

蕃書調所・・・1857＝27歳：*藩主の命で、中江藤樹の年譜を作成して、いよいよ100石の藩儒として召される矢先、備中松山藩儒山田方

谷が、藩主板倉勝清の命を受けて、門人三島中洲を介して、半分の50石になるが仕官するように推薦したい

と伝えてくるや、かねて方谷の思想等を知りたいと思っていたこともあって、快諾、すぐに頭角を著し、方

谷から剛と命名され、江戸藩邸の教授を任されて、三島中洲とともに方谷門人の筆頭となり、

桜田門外変・・・1860＝30歳：

生麦事件・・・1862＝32歳：建議して、洋式軍艦快風丸が領内玉島港に浮かべるなど、藩の兵術の革新に貢献、

薩摩藩士密航1865＝35歳：藩主板倉勝清が再び老中に登用されるにあたり、難局に鑑み、辞職するよう勧められるも、聞き入れられず、

薩長同盟・・・1866＝36歳：

大政奉還・・・1867＝37歳：京坂の情勢緊迫を知るに及んで、外国船に乗り、江戸より横浜を経て大坂に移る。

明治維新・・・1868＝38歳：*戊辰戦争では藩主板倉勝清が幕府軍に参加したために備中松山藩は"朝敵"とされてしまう。高齢の方谷に

代わって、三島中洲とともに藩の存続に尽力、太政官あてに藩主のために哀訴する名文を上書するなどして

、藩の存続が決まると、方谷が引退したこともあり、藩を退いて上京、学生の教授に当たり、従学する者数

百人を教え、やがて、薩摩藩の重野安繹と双壁をなすと言われるようになる。

初の日刊新聞1870＝40歳：高梁藩権少参事に任じらるが、山田方谷に尊敬の念を抱いていた木戸孝允から、方谷の出仕を要請するよう

に依頼され、方谷の引退の意思は固く、逆に方谷から、重野安繹とともに国史編纂の責任者になるように推

挙されて、太政官に出仕して大学小博士となり、大学御用掛を経て、権大外史、

廃藩置県・・・1871＝41歳：記録編修御用掛となるも、性格が全く逆の重野とは最初から対立して、

学問のすすめ1872＝42歳：依頼免官・位記返上するが、

明治6年政変 1873＝43歳：再び、文部省からの委嘱で、在宅のまま、修史の仕事再開、

佐賀の乱・・・1874＝44歳：歴史課御用掛となり、

初の民間工場1875＝45歳：国史編纂構想が太政官内における修史館設置へと発展したことから、修史局一等修撰から、

西南戦争・・・1877＝47歳：さらに、*一等修撰官となり、学士院会員にも選ばれ、明治天皇の東巡にも扈從するが、「太平記」の扱いを

巡る問題で、重野安繹と論戦になり、学界を二分するような事態になったため、

明治14年政変1881＝51歳：修史館を去り、宮内省に移って、文学御用掛となる。

秩父事件・・・1884＝54歳：「随筆紀程」刊行。東大教授を兼務するが、

帝国大学始・・・1886＝56歳：官制大改革によって非職となり、再び、編纂御用。

初の対等条約1888＝58歳：文学博士となる。

帝国憲法発布1889＝59歳：諸陵頭となり、帝国博物館理事歴史部長を兼ね、華族女学校を主宰、

帝国議会始・・・1890＝60歳：貴族院勅選議員、「古事類苑」編修総裁となる。

足尾鉾毒始・・・1891＝61歳：インフルエンザに罹り、胃を痛めたため、転地療養後、帰郷。

郡司千島探検1893＝63歳：この間、旧主であった板倉勝清を度々訪れてはその相談相手となり、

日清戦争始・・・1894＝64歳：東宮(後の大正天皇)の侍講に任じられ、

日清戦争終・・・1895＝65歳：病のため、許されて東京に戻り、神宮司庁古事類苑編集総裁から、

白馬会・・・1896＝66歳：*宮中顧問官となったが、まもなく没した。死の間際には'死後も自分の側近でいて欲しい'と勝静から懇願

されて、勝静の墓の隣に甕江の墓が設置されることになった。

子に川田順がいる。「近世名家文評」「講史余談」「壺簪社古文偶評」「得間項録」「文海指針」などが刊行された。

インターネット「川田甕江先生小伝」ほか、